

受験生は冬休みの前までに目標点突破を目指したセンター対策を、高2・高1生はここからスタートしよう！

I. 全体講評

「全国統一高校生テスト」の国語の平均点は、受験学年が一一〇・二点（二〇〇点満点、以下同）、高2生が九二・四点、高1生が八〇・四点であった。大学受験に向けた勉強がなされている受験学年と、やり始めた人が出始めた高2生、まだまだ多くがこれからの高1生とで歴然とした差が出たようだ。高2生、高1生は、よい結果が出た諸君はもちろん素晴らしいが、そうでなかったとしても問題は無い。むしろ、このテストを受験し、大学入試の第一関門とされている「センター試験」とはどういうものか、到達すべきレベルがどういうレベルかを体験できたことが、今後の勉強に大きくプラスになるはずである。受験勉強のスタートにフライングはない。早ければ早いほど有利となるのは間違いない。ぜひ、このテストをきっかけに受験勉強をスタートさせよう。

受験学年は、来年一月の本試が間近に迫っている時期であり、今まで頑張ってきた諸君は結果が表れてきていることと思う。残念ながら不本意な結果となってしまった諸君は、ここからはセンター試験の対策を本格的に始めよう。センター試験の過去問を利用し、正解の根拠を考えながらしっかりと解くことで、まだまだ得点力は伸びる

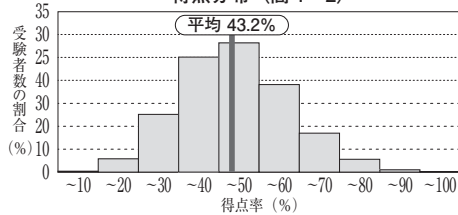
はずである。毎日の勉強にセンター演習を必ず組み込み、冬休みの前までに目標点を突破し、最終12月センター試験本番レベル模試で最終チェックが出来るように計画的に勉強を進めよう。

分野で見ると、今回、現代文についてはよい結果であった。特に論理的な文章である評論の平均点がほぼ7割なのは、勉強の成果の表れといえる。それに対して古典の伸びはいま一つであった。古文の問2の文法問題「な・に」の識別や漢文の問1の重要漢字の読み、漢詩の修辞といえれば必ず問われる定番の「押韻」の問題など、勉強していれば必ず学習するところの出来が悪かったことから見ると、「出題された古文・漢文が難しかった」という言い訳は通らない。勉強不足である。現代文がよかつただけに残念であった。

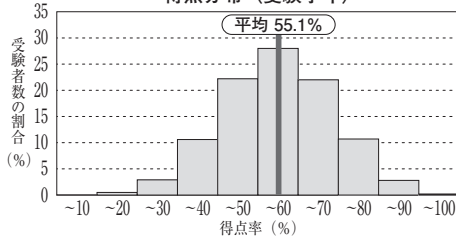
だが、古文は古典文法や古語、漢文は句法や重要語などの基本事項を身につけて、問題演習を繰り返せば、今からでも現代文以上に大きく伸ばせる科目だ。現代文は得点できるようになってきているのであるから、古典の結果がよくなかった諸君は、必ず今月中に基本事項を身につけ、センター過去問演習を徹底的に行おう。

高2生と高1生は、先に述べたとおり、受験勉強を進めている受験学年との差は歴然としている。「国語はやってもやらなくても変わらない」

得点分布 (高1・2)



得点分布 (受験学年)



■各学年の平均点、大問ごとの得点率

学年	平均点	第1問	第2問	第3問	第4問
高1	80.4点	55.1%	53.1%	24.4%	28.2%
高2	92.4点	60.9%	58.0%	31.1%	34.7%
受験学年	110.2点	69.6%	64.5%	41.6%	44.6%
全員	99.6点	64.5%	60.5%	35.4%	38.8%

ということはないのである。試験で出題されるものであるから、国語も、勉強をした人には成果が表れるものであることを肝に銘じてほしい。

分野ごとの留意点では、現代文の読解の基本は評論も小説も同じで、文中の根拠に基づいて考えることが何よりも大事である。頭で理解するだけでなく、文中の根拠を意識しながら演習を繰り返すことで、解法の要点を会得することが大切だ。今回特に現代文の得点の低かった人は、間違えたところをよく見直し、解説冊子や次のⅡ、大問別分析を参考に、どうすればよかったのかをしっかりとつかんでほしい。

古文・漢文については、受験学年以上に現代文との差が大きい。これは、現段階では古文・漢文の知識がほとんどないことを意味する。言い方を変えれば、古文・漢文は、文法、句法、語の意味等、基礎知識の積み重ねがものをいう、ということである。このことを念頭において今後の学習を進めよう。

## Ⅱ. 大問別分析

### 第1問 (評論)

「高得点に満足せず、どこを間違えたのかを把握して、今後の対策を立てよう」

第1問の得点率は、高1生が五五・一%、高2生が六〇・九%、高3生が六九・五%、高卒生が七二・三%と、かなりの高得点を示している。学年が上がるに従って、上昇しているのが大きな特徴である。読解力が学年とともに身につけてい

ることが実感できる。

本年度の本番が読解に手間取る科学論で、やや難問だったことをふまえれば、高得点になることはある程度予想できたが、課題文も設問もそれほど平易というわけではない。どこを間違えたのかをしつかり把握すれば、今後の対策も立てやすくなるはずだ。

なお、本文は一応芸術論の分野の内容であるが、芸術に科学技術文明がどのように関わっているかが考察されているという点では、広い視野から現代社会のありかたを見直す内容ともなっている。

設問ごとに分析すると、問5の内容説明問題、問6の(i)の文章の構成・展開に関する問題、(ii)の課題文全体の要旨把握問題が三〇〜四〇%台にとどまっていることに留意したい。特に高1生・高2生はまだ実力が身につけていない段階で、他とは大きな開きがある。こうしたことは、端的には選択肢を慎重に吟味する習慣がないことを示しているように思われる。

問1の漢字問題では、(ウ)の「強制」と同じ漢字を用いた正解が「制度」であるのに対して、⑤の「改正」を選んだ受験生が多かった。「共生、矯正、強請」などの同音異義語に注意をしたい。「矯正」(欠点を正しく改める)、「強請」(無理に頼む、せがむ)というニュアンスはこの文脈では不適当だ。

問4は、高1生・高2生の正答率が五〇%台前半と低いのが目立ち、誤答では③とした者が多かった。傍線部の「示唆的」と「人口に膾炙す

る」という言葉の意味がはっきりしなかったかもしれないが、デザインという言葉の普及は、機械による大量生産と密接な関係があることを示している、ということ把握すれば解けるはずだった。③は傍線部の次の段落の内容に関わるもので、話題が異なっている。

問5は問4以上に高1生・高2生の正答率が低かった。三〇〜四〇%台で、誤答では③が多い。傍線部は簡単にいえば、近代になり、デザインに対する関心が強くなったということで、各選択肢がまぎらわしく作られているので注意が必要だ。本文の内容に照らして選択肢を一つずつ慎重に吟味していくべきで、③は「全体と部分を分離していくデザイン」の造形原理」がデザインの定義と異なっている。

問6の(i)は高1生だけが四〇%台と低調だが、高2生以降では正答率五〇%を越えており、文章の構成・展開を巨視的に把握する力は多少身につけてきていると判断できる。一方、(ii)の正答率は全体で三九・八%と、今回の全設問中、最も低い数値を示している。誤答は①・②・④に分かれたが、これはいずれも適当な内容。③の「細部を微調整して仕上げてきた伝統的な装飾」はデザインと対立するものであり、機械による「複製」は不可能だという点で、正解は③に決まる。「適当でないもの」を選ぶという設問形式に慣れることにも留意しよう。

第2問 (小説)

問1の語彙問題も、問2〜6の説明問題も、「言葉の意味を正しくつかむ」意識が必要だ!

問1は(ア)が、受験学年の正答率四〇・〇%と非常に低かった。しかも、この設問だけ高1生の正答率の方が高い(四四・七%)。高3生は四〇・二%、高卒生に至っては三六・一%という異常事態である。高3生・高卒生諸君は、試験慣れして自分なりの解法を体得しているはずだが、この結果を見ると、その解法でよかったのが危ぶまれる。誤答では②・⑤を選んだ受験者がそれぞれ二割強もあった。「やまやま」の本来の意味「実現不可能だが、心から望んでいる」と、②「以前から考えていた」⑤「思い入れがある」とは、言葉の意味合いが大きく異なっている。特に高3生・高卒生諸君は、(ア)の解答プロセスを見直して、どこで間違ったのかを確認しておこう。問1はまずは辞書的な意味を最優先するという原則をもう一度見直しておきたい。

(イ)も受験学年の正答率が四六・七%と非常に低い。一割前後が誤答の①・③・⑤を選んでいて。これも「鄙びる」という言葉自体の意味から離れた、具体的に限定しすぎる間違いである。

説明問題では、問3が受験学年の正答率五八・四%と低かった。高1生に至っては正答率が三三・三%と低く、「表現効果を問う」というセンター特有の出題形式への経験の差が表れた問題であった。センターの小説問題を解く上で気をつけたいのは、作品の中心は主人公の心理である場合

が多いということだ。何気ない情景描写にも、主人公の心理が投影されていることが多い、ということにも留意しておこう。

問4も受験学年の正答率が五七・九%と低かった。誤答の④を選んだ人が二三・八%もいたが、④の紛らわしい間違いに気付けるかどうかセンター試験の勝負の分かれ目ともいえる。間違えた人はしつかり見直しておこう。

問6は正解選択肢⑤の受験学年の正答率が六六・九%で、ここは⑤を選べなかったのはなぜかというよりも、他の誤答の間違いに気づけなかったのはなぜか、という点をより反省すべきである。

たとえば①では「懐かしいもの」、②では香月さん以外の人の「視点を」、④では、概要を説明するなどが明らかな誤りで、これに気づけなかったのは、これらの説明箇所の言葉の意味がちんと理解できていないからだ。センター現代文では、言葉の意味を正確にとらえる力がどれだけあるかが結果を左右する。銘記しておこう。

第3問 (古文)

選択肢吟味では、必ず本文の根拠を押さえよう!

鎌倉時代の物語『いほでしのぶ』からの出題。女宮を慕う中将が見知らぬ女と契る場面である。受験学年の全体の得点率は四一・六%、高1生は二四・四%、高2生は三二・一%にとどまった。

問1の語釈問題は、受験学年と高1生・高2生とで正答率に最も差が出た問題で、受験学年が概

ね五〜六割の出来であったのに対し、高1生では概ね一〜三割であった。(ア)の「ずるなり」は一単語で、(イ)は「心にくし」「際」、(ウ)は「むげに」「うたて」など古語の意味が複数問われており、語彙力の差が出たといえる。早めに学習に取り組みたい。

問2は「な・に」の識別の問題。古文の識別問題の勉強をすれば必ず身につけるべきものだが、受験学年でも二割程度という低い正答率であった。誤答が多かったのは、e「なめり」を間違った②で、撥音便の元の形「なるめり」がわからなかったようだ。

問3は和歌の説明の問題。詠み手を間違った④を選ぶ問題で、受験学年は五割の正答率であった。が、高1・2生には難しかったようで、高1生は三割、高2生でも四割の正答率にとどまった。秋の風情にことよせた歌を詠んだ女に、中将が言い寄るCの歌の内容が読み取りづらく、⑨への誤答が多かった。和歌の問題では、和歌はもちろん、和歌の前後の文の展開にも注意しよう。

問4は傍線部の内容説明問題で、反語に注意して、中将と女の仲の妨げがないことを読み取っていた。これは全学年で正答率四割前後の正答率であった。反語が読み取れていない②・③・④への誤答は少なかつたが、女宮と女を比較している⑤への誤答がやや多かつた。本文から逸脱する言い過ぎを含む選択肢に注意しよう。

問5は中将の女に対する心情説明の問題で、どの学年も三割前後の正答率で苦戦している。敬語があるのに女の心情とした④への誤答は少なかつた



たが、中將が女に対して真剣になりかけたとした①への誤答が多く、正答率に並ぶほどであった。本文の宿直所での心中語に注意しよう。

問6の内容合致問題は、全学年で正答率が二〜三割にとどまり、低調であった。誤答は女との関係に尻込みしたとする④に集中し、正答率を越えてしまった。本文では自ら積極的にではないにしても、手紙をやったり訪れたりしている。必ず本文の該当箇所と照合して、確認する作業を怠らないようにしよう。

第4問 (漢文)

語彙と句法の知識をしっかりと身につけて、得点源にしよう！

菅原道真の『菅家文章』からの出題。古くからの親友と詩文を詠んで酒を酌み交わす至福を、漢詩を交えて述べている文章である。得点率は、受験学年で四四・六％、高1生が二八・二％、高2生が三四・七％で、特に高1生・高2生では語彙や句法など、漢文の基礎知識を問う問題でも苦戦したことがうかがえる。

問1は漢字の読みの問題。(ア)が「若」、(イ)が「適」で、どちらも重要語であるが、受験学年でも五〜六割、高1・2生では二〜三割台の正答率であった。重要語はきちんと覚えておきたいが、特に「若」は用法が多く、頻出語なので高1・2生もこの機会に習得し、得点源にできるようにしたい。

問2は、人物像を問う問題で、「文郎中」が故人であり親友であり、詩家と酒敵をも兼ねている

ことを読み取る。受験学年は五割を超えたが、高1・2生では三割台の正答率にとどまった。「故人」の漢文特有の意味と、「未だ必ずしもさず」が句法としては部分否定であるが、ここでは文郎中が「兼ねるの者」であることを表現する文脈の中で用いられていることを読み取らなければならぬ。部分否定のまま解釈した②・③への誤答が多かった。

問3は、「ざるべからず」という二重否定の句法によって「惜しまなければならぬ」、つまり大切にしなければならぬことを読み取る問題である。これは受験学年でも四割の正答率にとどまり、高1生に至っては三割を切った。反対の「惜しんでも仕方ない」という①・⑤への誤答が、合計数で正答率に匹敵した。間違えた人は、解説をよく読んでしっかりと復習しておこう。

問4も、「盍ぞざる」という再読文字の勧誘の用法の知識をもとに答える問題である。受験学年と高2生は三割台、高1生は二割台の正答率にとどまった。誤答が多かった①は、「早華」にもかかわらず、満開の花と解釈してしまっている。傍線部の細部にも注意が必要である。

問5のIは漢詩の押韻の問題であるが、そうと気づかずに内容的に適当そうな①への誤答が多かった。反対に、韻としては適当だが意味が不適当な⑥への誤答は比較的少なかった。正答率は受験学年で四割台、高1・2生は三割台であった。漢詩が出る押韻の問題がよく出る。漢詩で偶数句末に空欄があったら、まず押韻の問題と違って間違いない。IIはIの解釈の問題であったので、

ほぼIの選択肢に対応する正答率で、「早梅」が問4同様、ポイントにもなっているので注意したい。

問6は本文全体の趣旨を問う問題。傍線部には使役の「使(〜ヲシテ：(セ)シム)」や、再読文字「応(応二〜ベシ)」も用いられていた。禁酒の令にも特例が許されていたことが読み取れていない①・②への誤答が合計で三割を超えており、第一段落の「もし昔なじみを訪問したり、親友を見舞ったりするのでなければ」という仮定文の解釈が難しかったようだ。重要語「故人」の意味を間違えた③も誤答が多かった。内容合致問題でもあるので、大意を解釈する一方で、細部の吟味も怠らないようにしたい。正答率は受験学年でも三割程度にとどまった。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆受験生及び既に受験勉強に励んでいる人へ

高3・高卒生の諸君は、今回のテストでこれまでの学習成果を実感することができたであろうか。国公立の二次試験や私大で国語が必要な受験生は、二次・私大対策にも取りかかっている時期であろう。だがセンター試験のレベルの問題に手応えが無いまま二次・私大対策に突入しても思うような成果は出ない。センター試験レベルの力を固めることは、国語では他教科以上に二次・私大対策に直結する。並行して志望校の過去問研究を進めながらもセンター対策は忘れずにこれからの

学習を進めてほしい。

今回のテストで思うような結果が出なかった諸君も、今回の成績に落胆せずに学習を続けてほしい。努力を継続することが何よりも大切である。基礎固めが終わったとしてもそれが即座に成績に現れるわけではない。これまで培った基礎力をベースにこれからの学習を重ねることで、今後の模試、さらには本試で一気に結果を出すことも可能となる。緊張感をもって臨みたい。

また、センター試験の国語を考える上でポイントとなることに「時間配分」と「漢文」がある。八〇分という時間の制約の中で効率よく問題を解くためには、自分なりの時間配分や解く順序の工夫が必要だ。これから本格化する過去問演習の際に、意識してほしいことである。

また、漢文は暗記項目が多く、努力が必ず得点に結びつく分野である。大問を解く順序は問わないうが、漢文(第4問)を効率よく解き、現代文や古文に時間を回すことを意識してほしい。

時間配分を制することがセンター試験の国語の得点の最大化につながることを肝に銘じて、残された時間を有効に過ごしてほしい。

高2生で、既に本格的な受験勉強に入っている諸君は、とにかくまずは、漢字・語句・古文単語・文法・句法など、必要な基礎知識の習得と拡充に努めよう。読解力の強化、センター試験の問題に対応できる体系的な解法の習得など、学ぶべきことはたくさんあるが、そもそも高度な読解力は、十分な基礎知識がなければ本物にはならない。

い。それをよく自覚して、基礎力の充実に向けた学習を粘り強く積み重ねてほしい。そのうえで余裕のある諸君は、センター試験に特有の解法を意識した学習にもチャレンジしていくとよい。

### ◆これから本格的な受験勉強に取り組む人へ

受験勉強はまだこれからという高2生は、受験は目前だという意識を強くもって、まずは基礎知識の習得に努めることが大切である。

諸君の中には、今回のテストを受験して初めてセンター試験とはどういうものかを知った人も多いことであろう。センター試験が、高度な読解力の間われるテストであることも感じられたであろう。文章は、難関国公立大学の二次試験や難関私立レベルの内容として通用するものである。高2生の秋の段階でこうした現実が認識できたということは、実に幸運なことなのだ。ここをスタートラインとしてぜひやるべきことを始めよう。

まずは、漢字・語彙・古文単語・文法・句法といった基礎学習の充実をめざしたい。基礎知識が直接問われることは少ないが、知っていなければ正確な読解ができず、問いにも答えられない。そのことをしっかりと認識して、土台作りⅡ基礎事項を身につけることが大切である。今からスタートすれば、高3生になる頃には実感が得られるはずだ。

高1生で受験した諸君は、どんな感想を持っただろうか。結果はともかくとして、この時期に本

格的なセンター模試にチャレンジできたのはたいへん幸運なことである。ここから本格的な学習のスタートを切ってもらいたい。

まずは基礎知識の習得を心がけよう。漢字・語彙・古文単語・文法・句法など、覚えなければならぬことはたくさんある。そうしたものにじっくりと取り組み、自分のものにするのが、本格的な読解力の育成につながる。まだまだ時間的な余裕があるのだからそれを生かして、ぜひ、しっかりと土台作りを実践しよう。そのうえで、次のステップへ、センター試験に対応できる体系的な学習へと進んでいこう。